

実りある授業のために 小学校音楽

〔H24. 秋〕 島根県教育委員会

♪ 1 学習指導について

①指導のねらいや手だてを明確にし、子どもが感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視する！

- これは、音楽科の特性に即した思考力・判断力・表現力の育成のために不可欠なことである。すなわち、音や音楽から感じ取ったことをもとに思考・判断したことを言語等で表現していくことである。そのためには、〔共通事項〕の事項アに位置付けられている「音楽的な感受（聴き取り＋感じ取り）」を基盤とした授業づくりを行っていくことが大切である。

②音楽づくりと鑑賞の学習指導の工夫！

＜音楽づくり＞

- 指導事項アは、「音遊び（低学年）」、「即興的な表現（中・高学年）」を通して、音の不思議さや面白さに気付き、『これらの音をこうしたら音楽になるかな』という自分なりの発想や考えをもたせることが求められている。例えば、「使う音を限定（ド・ミ・ファ・ソ・シなど）する」などの約束事をもとに様々な音楽的な発想をもって、子ども自身が音楽的な学びを楽しんでいる姿を大切にしなければならないということである。また、指導者は、指導事項イとの関連をもたせながら学習内容を充実させていくことが重要となる。
- これからの音楽づくりの授業で大切にしたいことは、「つくるための手掛かりとなる条件を提示すること」と「子どもの自由な発想を生かす」ことである。この両者のバランスは、子どもの学習経験によるものが大きいため、系統性のある学習指導が不可欠となる。

＜鑑賞＞


- 鑑賞分野で大切にしたいことは、「音楽を全体にわたって味わって聴く」ということである。つまり、楽曲の特徴的なところに焦点を当てたり、特徴的な要素を聴き分けたりすることだけに留まらないようにしなければならない。そのためには、「音楽的な感受」を基盤として、音楽全体を味わって聴くことができるような指導の手立てが求められる。

③音楽科の学習をより充実させるために、言語活動や体を動かす活動等を取り入れる！

- 「音楽的な感受」を基盤とした気付きを記すワークシートの工夫が求められる。例えば右図のように、『気が付いたこと（感じたことと理由となる音楽的な特徴）』と『感じ取ったこと（学習となる音楽について自分はどのように感じ取ったのか）』の視点で書かせるなどの言語活動を取り入れることで、〔共通事項〕を手掛かりにしながら音楽的な学びが深まっていくような指導方法を工夫することが必要である。
- 体を動かす活動については、単に身体で表現することが目的とならないよう、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるように指導することが大切である。

曲名（ノルウェー・舞曲 第2番） 作曲家（グリーグ）
4年 組 名前

1 音楽をきいて、気が付いたことや感じ取ったことを書きましょう。

	はじめ	なか	おわり
	オーボエのせみりつ 明るい感じ	金かん笥や低い音の楽器 たくさんの楽器 どつぜんどまった 暗い・こわい感じ	はじめと同じせみりつ また明るくなった感じ
速さ	ゆっくり	はやい	ゆっくり
強弱	しずか・弱い	はげしい・強い	しずか・弱い

☞平成 23 年 11 月
国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」より転用

♪ 2 学習評価について

①各観点の趣旨に沿った評価規準を設定する！

- ・ 観点イ「音楽表現の創意工夫」は、表現領域（歌唱・器楽・音楽づくり）を評価する観点であり、音や音楽を形づくっている要素を手掛かりとして聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、思いや意図をもって音楽表現を工夫している子どもの質的な高まりを見取ることが趣旨となる。
- ・ 観点エ「鑑賞の能力」は、鑑賞領域を評価する観点であり、音や音楽を形づくっている要素を手掛かりとして聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、音楽全体を味わって聴いている子どもの質的な高まりを見取ることが趣旨となる。

②結果を記録に残す評価場面の精選をする！

- ・ 従前の音楽の評価計画では、「題材の評価規準」を設定し、さらに、それをより具体的にした「学習活動における具体の評価規準」を設定するケースが多かったが、評価場面等を精選することによって、「題材の評価規準」をそのまま実際の学習評価に用いることも可能となる。

♪ 3 自ら学ぶ子どもを育てる授業づくりのポイント

①教材研究と学習指導の工夫！

- ・ 指導者は、教材曲の音楽的なよさや面白さ、美しさがどこにあるのか、それらはどの要素の働きによって生み出されているかを把握しておく必要がある。そのことは、どの子にも気付かせたい表現や鑑賞のポイントとなるものであり、素材・教材研究には不可欠なことである。
- ・ 教材曲の特徴などに即して、感じ取ったことなどを絵や図で表す、体の動きを表すなどの手立てを工夫しながら学習活動を構成することが、学習内容への関心と意欲を高めるポイントとなる。

②音や音楽との出会いを充実させるための言葉の活用！

- ・ 子どもが、音楽のよさや面白さ、美しさを自ら見付けていったり、個々の思いや意図を交流しながら音楽表現を高めていったりする主体的・創造的な学習を充実させる有効な手段が言葉である。音楽に関する用語や記号等の〔共通事項〕の内容に係る言葉は、そのために重要な役割を果たすということを指導者は認識しておくことが重要である。
- ・ 最も大切なことは「音楽活動そのもの」であり、言葉で表すことそのものが学習の目的とならないように、教師は十分に配慮しなければならない。

③子どもの向上的な変容を見取る！

- ・ 子どもが音楽表現や鑑賞の活動に対して意欲が高まる時は、『自分の変容を実感できたとき』である。例えば、「みんなで音楽表現を高めることができた」「感じ取ったことを交流することで聴く喜びが深まった」という実感である。
- ・ 子ども自身が「できた!」「わかった!」という向上的な変容を自覚できるようになると、次の学習活動への意欲に高まりが見られるようになる。そのためには、教師が個々の子どもの意欲の高まりをつぶさに見取るとともに、一層意欲を高めることができる言葉かけを行うなど、的確な指導を講じることが極めて重要となる。